

《インタビュー記録》

## 歴史教育体験を聞く

### 橋高信先生

日時：2011年11月22日・12月4日

2012年2月26日・5月16日

場所：東京都豊島区西池袋

聞き手：茨木智志・大木匡尚・鈴木正弘

#### はじめに

「歴史教育体験を聞く」の目的は、歴史教育に携わってきた先生がたの歴史教育の体験、すなわち自分が受けてきた歴史教育、そして自分が行なってきた歴史教育の話を軸として、さまざまな経験や思いをインタビューの形で聞き取り、その記録を活字にすることで、歴史教師の共有の財産とすることにある。

今回のインタビューは、橋高信(たちばな たかのぶ)先生がお引き受け下さった。橋先生は1918年のお生まれで、戦争中に大学を卒業して東京都立の旧制中学の教師となり、出征と復員をはさんで、戦後は都立高校の世界史教師として活躍された。特に、世界史実施直後の『世界史の可能性』(尾鍋輝彦編、1950年)に掲載された座談会での発言や論文は、世界史教育を振り返る際に、今日に至るまでいく度も参照されている。

以下は、橋先生のインタビューの記録である。

#### 1. 生い立ち

— 本日は、よろしく願いいたします。まず、生い立ちからお聞かせください。

1918年、大正7年の5月23日生まれで、93歳になります。生まれは、本郷元町<sup>1</sup>です。のちに、大荷物を載せた人力車に乗せられて、引っ越しをしました。当時は乗り物に乗るのは珍しかったので、周りの景色が変わるのがとても面白く、それが私の一番最初の記憶です。そのときに谷中初音町<sup>2</sup>に移りました。日暮里駅(JR山手線)のあたりです。小学校は、谷中尋常小学校<sup>3</sup>です。小学校5年くらいで、牛込の若松町原町<sup>4</sup>の原町警察

<sup>1</sup> 本郷元町：東京市本郷区。現在の東京都文京区。

<sup>2</sup> 谷中初音町：東京市下谷区。現在の東京都台東区。

<sup>3</sup> 谷中尋常小学校：現在の東京都台東区立谷中小学校。

署の下の貸家に越します。今でいうと新宿区の住民になります。

- 橋先生が5歳のときに、関東大震災（大正12〔1923〕年9月1日）がありましたが、ご記憶にありますか。

谷中初音町の自宅にいましたが、家は倒れませんでしたし、焼けませんでした。地震は、私がミカン箱に絵本を詰めているときでした。揺れているときに、父が3つ下の妹をじっと抱いていたのを覚えています。日暮里駅と道灌山（とうかんやま）の間の高台に、お諏方様（すわ）という神社があって、その下を国電（現・JR山手線）が走っています。その高台の神社から見ると、下町が全部火で燃えていました。恐ろしいというより、そのときは、きれいだと思います。

- 中学校と高等学校は、どちらに行かれたのでしょうか。また、授業は、どのようなものでしたでしょうか。

中学は、早稲田中学校<sup>4</sup>に入学しました。歴史の授業は、忘れてしまいました。印象のはっきりしているのは、国語の先生でした。俳句や和歌、江戸時代の擬古文を勉強するのが楽しかったです。それから理科系が好きでした。化学は嫌いでしたけど（笑）。早稲田中学校には、懐かしい先生がたくさんいました。

高校は、浦和高校<sup>6</sup>に入りますが、浪人を2年ほどしました。高校受験は大変ですよ。お金を使う学校には行けず、公立というと案外難しいものでした。浦和高校では、1年間、寮に入りました。ドイツ語の文乙でした。甲が英語、丙がフランス語でした<sup>7</sup>。

- 浦和高校ですと、西洋史の吉岡力<sup>8</sup>先生がいらしたかと思います。また、安斎宏索（あさいこうさく）校長が厳しかったと聞きますが。

吉岡力先生は、いましたね。安斎校長は、名前は覚えています。高校生は踏み外している者が多いので、学生指導課の先生とはよく喧嘩になりました。

---

<sup>4</sup> 若松町・原町：東京市牛込区。現在の東京都新宿区。

<sup>5</sup> （旧制）早稲田中学校：現在の早稲田中学校・高等学校（東京都新宿区）。旧制中学校は、男子生徒が学ぶ5年間の中等教育機関であった。

<sup>6</sup> （旧制）浦和高等学校：現在の埼玉大学（埼玉県さいたま市）。旧制高等学校は、男子学生が学ぶ3年間の高等教育機関であった。

<sup>7</sup> 旧制高等学校は、文科と理科に分かれ、さらに履修する外国語によって甲、乙などに分かれた。

<sup>8</sup> 吉岡力：1908～1975年、西洋史専攻。

## 2. 大学

大学は、東大の倫理学<sup>9</sup>に入ります。和辻哲郎<sup>10</sup>先生が、ちょうどそのキャップのときに入りました。

— 和辻先生がいらしたので、倫理学科に進まれたのでしょうか。

そうです。ただ、どこが一番楽に入れるかを考えました。高校に入れば、大学はほとんど無試験です。高校生なんか始終遊んでいますから、試験をされるとだめです<sup>11</sup>。試験をする学科には行かない、空いている学科に入ろうやというわけで。それで、倫理学科に入っちゃいました。そこに和辻先生がいたというわけです。

和辻先生は有名で偉い先生でしたが、自分は不勉強でそこまでは知りませんでした。ずいぶん優しい、我々の言うことをよく聞いてくれる先生だと感心したのが入ったときの印象でした。すごい先生ということが分かり、本を読みだしました。和辻先生は、書いたものはすごいのですが、講義やお話は下手でしたね(笑)。『古寺巡礼』を読んだのが、大学に行く前の年でしたか。

いろいろなことを考えさせられる学生生活をしました。びっくり仰天することがいろいろ入ってきて、学問の世界というのは大変なものだと思いました。卒業論文は、「中江藤樹、熊沢蕃山、富永仲基に於ける時所位の観念について」というものです。「時所」とは、時間と空間を指します。

— (卒業論文を) 拝見します。提出が、昭和18(1943)年6月13日となっています。「和辻教授」のところに「和辻」印が押されていますね。もうひとかたの「金子助教授」とは、どなたでしょうか。

金子武蔵<sup>12</sup>先生です。金子先生は西洋哲学の研究者で、ヘーゲルの法哲学が専門です。それで、この年の9月だかに卒業になります。卒業するときに、父が私についてきて、和辻先生と話をしました。父は、外出して誰かと話をするのが大嫌いな人でしたので、私の卒業が嬉しかったのだらうなと思いました。

— 卒業後、すぐに教職に就かれたのでしょうか。

在学中に、満洲の奉天<sup>13</sup>の日系士官学校の教官の話がありました。当時の就職として

<sup>9</sup> 東京帝国大学文学部倫理学科。旧制大学は3年間であった。

<sup>10</sup> 和辻哲郎：1889～1960年、倫理学・哲学専攻。当時、倫理学科の主任教授であった。

<sup>11</sup> 当時は、定員と志願者数に応じて、大学の学部や学科により入学試験の有無は異なった。文学部は比較的無試験が多かったという。また東京帝国大学は高等学校卒業生以外の入学を認めていなかった。

<sup>12</sup> 金子武蔵：1905～1987年、哲学専攻。

<sup>13</sup> 奉天：現在の中国遼寧省瀋陽市。中国東北部には、1932～1945年の間、日本による「満洲国(帝国)」

は恵まれていたらしいのですが、満洲のような寒いところに行ったら、自分は凍え死んじやうから嫌だと断りました。

### 3. 東京都立豊島中学校への就職

それで、豊島中学<sup>14</sup>、のちの文京高校に入ります。これがスタートポイントでした。

豊島中学の川島源司<sup>15</sup>校長は、元は九段中学<sup>16</sup>の校長でした。浦和高校の仲間の寺田健君が、九段中学で川島先生の教え子でしたので、私も川島先生とは面識がありました。満洲に行くのが嫌なら、先生でもするかというので、寺田君と私の二人で川島校長に会いに行きました。そうしたら、「明日から来てくれ」と言われまして、それで先生になっちゃいました。学生服が脱げないうちに勤めました。本当に自分は苦勞を知らないですね。

— 授業は何を担当されたのでしょうか。

かわいい中学生の前で教えました。担当は、修身と公民でした。公民というのは、修身だとか、社会だとか、歴史の初歩だとかが、ゴチャゴチャになっているものですので、大学を出ていれば、何でもかんでもできるようなものでした。修身もやった覚えがあります。確か憲法を教えた覚えもありますが、これは戦後のことだったかも知れません。それから、昭和19(1944)年4月に入学する生徒のテストやクラス分けなどをしました。

豊島中学は、元は東京市立の中学校で、養育院<sup>17</sup>の跡地にできました。私が勤めたのは、できたすぐ後になります。

### 4. 出征

— その後の出征について、お聞かせください。

昭和19(1944)年6月に出征しました。赤紙(召集令状)で取られました。まず、佐賀に行きました。そこで、3か月間の新兵教育を受けました。歩兵かと思ったら、通信

---

が存在した。

<sup>14</sup> (旧制) 東京都立豊島中学校：1940年に第三東京市立中学校として創設され、1943年の都制実施により、東京都立豊島中学校と改称された。戦後の新学制下で、東京都立文京高等学校として現在に至る(東京都豊島区)。

<sup>15</sup> 川島源司：1891～1982年。

<sup>16</sup> (旧制) 東京都立九段中学校：前身は、第一東京市立中学校。戦後に東京都立九段高等学校となり、現在は千代田区立九段中等教育学校となっている(東京都千代田区)。

<sup>17</sup> 養育院巣鴨分院。

兵でした。楽をしました。この頃の通信隊というのは、電信機を担いで、歩いていけばいいんです。何を通信するかというと0から9までの数字です。その10個のモールス符号を覚えていて、数字が並んだのを打ってくれと言われて、覚えたのを打てばいいんです。暗号なんか分からないけど、それを上官に渡せばよかった。

よく軍隊でいじめられてという話があるけど、通信ができればよかった。だから、全然ひっぱたかれるなんてことはなかった。大変に恵まれていました。軍隊は人を大事にしてくれるなという印象が強く、私の軍隊観というのは、そんなに苦しいところだったというのではないんです。新しいきれいな軍服を支給されて、「東京の家に帰って、親に会ってこい」と言われました。ただ、一つ星の一等兵は外に出ると始終敬礼してないといけないので、娑婆<sup>18</sup>に出ると大変でした。

それで、また、東京から戻りましたが、自分の所属する隊はいなくなっていました。「お前たちは中支<sup>19</sup>派遣要員だ」と聞かされて、これは生きては帰れないと思っていました。同年兵はみんな中支に行かされました。私が原隊に戻りましたら、中隊長が「お前は中支に行かなくて、いいようだから、ここに残っている」と。初年兵でこんないいことがあるのかというような軍隊生活を1週間くらい送りました。そのときでしたか、浦和高校の同級生たちが部隊に来たので、「よう」と声をかけましたが、とてもすげなく扱われました。こちらは星一つで、彼らは将校のような扱いでしたので。生意気なので、そのとき私は怒りましたよ。それから、熊本で6か月の幹部候補生教育を受けました。その後、善通寺（香川県）に行けと言われました。善通寺から和歌山に行かされて、和歌山ではすごい空襲を受けましたが、特に怪我はしませんでした<sup>20</sup>。

— 8月15日（敗戦）のときは、どちらにいましたか。

和歌山から高知に行きました。途中の広島は、原爆（8月6日）の一日前でした。「敵が上陸するかもしれない。上陸するのをたたくのが仕事だ」と言われました。このときは予備少尉でした。どこからでも上陸できるところですので、兵隊を連れて、山の中に入りました。本当に心細い国土防衛をやっていました。そういつているうちに、昭和20（1945）年8月15日に終戦になりました。天皇陛下の玉音放送<sup>21</sup>は、高知県の山の中で聞きました。

終戦後は、電気が付けられて明るくなりました。兵隊たちは大喜びで電気の付いているところで、川で魚を取ったりと面白い生活をしていました。そんなこともしていられないので、もう帰ってもよろしい、ということで、山の中から行李に私物を持って、実

<sup>18</sup> 「娑婆」は、この場合は軍隊の外の世界を指す旧軍隊での用語。路上などで、階級が自分よりも上の軍人に敬礼をしないことは、欠礼として厳しくとがめられた。

<sup>19</sup> 中支：中国の華中（長江の中・下流域）を指した言葉。

<sup>20</sup> 和歌山空襲：1945年7月9日深夜から7月10日未明にかけての米軍による大規模な空襲。和歌山市の中心部は和歌山城を含めて焼失し、死者1200名を超える大きな被害を受けた。

<sup>21</sup> 玉音放送：「玉音」とは天皇の肉声のこと。昭和天皇が録音した「終戦の詔書」（1945年8月14日）が1945年8月15日正午にラジオで放送された。この時点をもって戦争終結とされている。

家に帰ってきました。そうして、9月には復員しました。

## 5. 復員・復職

— 文京高校の同窓会報<sup>22</sup>には、9月10日に東京に戻ったとありますが、こちらですか。

そうです。ここの自宅です。今いる、この家が幸い残っていました。

豊島中学に戻ったのですが、学校はすっかり焼けていました。コンクリの建物で残っているのがありましたが、焼けてしまって、中はがらんどうでした。そんな建物に、近くの小学校から、机や椅子を分けてもらって運んできました。昔から知っている先生もほとんどいませんでしたが、野口彰<sup>23</sup>校長、奥田行信<sup>24</sup>教頭、菅野二郎<sup>25</sup>さんたちがいました。数少ない先生たちが学校を守ろう、作っていこうということで、戦後が始まりました。校長さんから「長い間、ご苦労様でした。しばらく、おうちでご静養になってらっしゃい」と言われ、ひと月くらい家にいました。その後、新入生の受験だのなんなのて呼び出されました。

校舎がなくなって、あちこち歩きました。小学校でやりました。小学校では子どもがほとんどいなくて、空いている小学校があちこちにありました。そこで校舎を借りてしばらくいました。小学校を転々として、戦後の豊島中学は始まりました。関口台町小学校（東京都文京区関口）というのが、椿山荘<sup>26</sup>のはじめにありました。ここにいたこともありました。それから、本郷元町小学校<sup>27</sup>は、水道橋駅（JR 総武線）の横でした。そこに、みんなが行っていました。

戦争から帰ってきて、授業は持ちましたが、生徒がいないんですよ。50人いたクラスが5人だの6人だのになっていました。そういうのを集めて、クラスを編成していました。その後、家が焼け残っていた生徒が少しずつ出てきて、だんだん多くなってきました。

授業は、何を担当したかな。

— 同窓会報では、社会の他に、国語・漢文、英語、それから体育も教えたとありますが。

---

<sup>22</sup> 『紫筍』第50号、東京都立文京高等学校同窓会、2007年。本誌に「あの頃の文京、あの先生に聞く 今でも「如何に生くべきか」を考える 橘高信先生」が掲載されている。同窓会報については、以下同じ。

<sup>23</sup> 野口彰：1894～1955年。

<sup>24</sup> 奥田行信：1897～1981年、数学専攻。1947年4月から豊島中学、文京高校の校長を務めた。

<sup>25</sup> 菅野二郎：日本史専攻。

<sup>26</sup> 椿山荘：元は、1878年に山県有朋が建てた、広大な庭園を備えた私邸。1952年からは結婚式場などとして知られる。

<sup>27</sup> (本郷) 元町小学校：当時は本郷区立元町国民学校。後に文京区立元町小学校（1998年閉校）。

やりました。体育は、私は柔道をやっていたので。

本郷元町小学校に間借りしているときに、豊島中学は文京高校になりました(1948年)。その後、もとの大塚に戻るかと言われ、念願の校舎ができるので帰ろうとしたときに(1952年)、学校の名前を何とするかということになりました。教務主任をしていた先生が、「文京区の元町から豊島区の大塚に戻っても通用する名前を付けなくてはいけない。豊島中学をやめて文京高校にしたんだから、文京高校でいいじゃないか。文京区で高校になったんだから文京でいいじゃないか」と。それで、豊島区の大塚に戻っても、文京高校のままになりました。あのころは面白かったね。

## 6. 歴史教師へ

— 昭和20(1945)年12月に、修身・日本歴史・地理の三教科の停止<sup>28</sup>がありました。

修身と公民は、戦後になくなりました。科目のない先生が、一人ポツンといるのが私なんです。何かやるか、ということになったときに、社会科の先生ということになっちゃいました<sup>29</sup>。それなら、歴史でもやるかというので、歴史を担当しました。私は歴史を、大学を含めて、全然していません。

— 同窓会報では、「奥田教頭に免許がなくなったと相談したら、これからは世界史と言う科目が出来るので、それを担当して欲しいと言われた」とありますが。

奥田先生からは、「倫理をやっているのであれば、歴史も教えられるんじゃないか」と言われました。「戦後になって、まさか修身・公民のようなものを教えるのは嫌だろう」と聞かれ、「嫌です」と答えました。「それじゃあ、世界史でもやったらどうだ」と言われたことがありました。「では、やりましょう」ということになりました。もともと倫理ですから、思想史はやっていましたので。

それから、何かの話の中で、東洋史、西洋史を一つにするとき、なんて名前にするかがいろいろ出ました。第一歴史とか、第二歴史とか。

— それは興味深いお話ですが、いつ、どこでのお話でしょうか。

---

<sup>28</sup> 1945年12月31日の占領軍による「修身、日本歴史及び地理停止ニ関スル件」の指令により、これらの授業が一定期間、停止された。修身の再開はなかった。

<sup>29</sup> 当時の高校1年の「(一般)社会」に関わるものとして、橘高信「貨幣の沿革(高校一年 単元一、二)」(『社会科研究資料』第2号、高等教育研究会、1948年11月)がある。本誌「編修後記」では、「高等学校第1学年単元2」の「われわれの経済生活に対して、政府はどんなことをしているか」に関する「一資料」と説明している。

講習のときだったか、教員の会での話だったか、そうでなくて雑談だったかも知れません。確かな記憶ではないのですが、こういう空気であったという記憶はあります。

— 文京高校での世界史担当は、橘先生がお一人でしたか。

そうです。日本史は菅野さんでした。一般社会と地理の先生は、別にいました。

— この時期の歴史教科書をいくつかお持ちしました（文部省『中等歴史一』1944年。中等学校教科書株式会社『西洋の歴史（1）』1947年。尾鍋輝彦『100ページの世界史』1950年）が、授業で使われましたでしょうか。

使いましたかね。覚えていませんね。

## 7. 座談会「世界史の基本問題」（1949年夏）

— 橘先生は、『世界史の可能性 — 理論と教育 —』（尾鍋輝彦編、東京大学協同組合出版部、1950年3月）の中での、1949年夏の座談会「世界史の基本問題」に参加されています。参加者の中で、知っていたかたは、どなたでしょうか。

尾鍋輝彦<sup>30</sup>先生が一番近かった先生です。世界史ということが出てくる過程において、お近づきになりました。そう、座談会は本郷（東京都文京区）でありました。自分は歴史を教える教師だ、尾鍋先生は大学で歴史を教える教師だということで、共通に話ができる点があるというので、よく話をしたことがありました。やはり一番接触していたのは尾鍋先生ですね。

座談会は誰が計画したのかな。一堂に会して何やかや言ったのは覚えています。覚えているのですが、来ている先生のこれが誰とかいうのは全然わからない。後から、こうやって本に書いてあるのを見ると、すごい人たちがいたのだなと思います<sup>31</sup>。ずいぶん勝手に生意気なことを言っていたなあと考えられるんですが。この中で席も近くに行くし、言葉を交わせたのも尾鍋先生だけです。社会科のお仲間として、割としばしば会えたのが尾鍋先生なんです。私が世界史を担当することになってから、歴史の先生としてお近づきになったような気がします。

<sup>30</sup> 尾鍋輝彦：1908～1997年、西洋史専攻。

<sup>31</sup> 座談会の出席者は、飯塚浩二（1906～1970年）、三上次男（1907～1987年）、村川堅太郎（1907～1991年）、尾鍋輝彦（1908～1997年）、増田四郎（1908～1997年）、山本達郎（1910～2001年）、江口朴郎（1911～1989年）、石母田正（1912～1986年）、中村元（1912～1999年）、遠山茂樹（1914～2011年）、矢田俊隆（1915～2000年）、倉橋文雄（1916～1983年）、橘高信（1918年生まれ）の13名であった（年齢順）。



一 座談会で橘先生は、高校教師の立場から多くの議論を展開されていますが<sup>32</sup>。

歴史を教えましたけど、実際の専門は倫理です。倫理は理論が多くて、一つ概念として何を意味するかを勉強してきました。しかし、教えるとき、それを表に出せません。勢い表面的というか直接的な視点からしか話ができませんでした。根本的なことまでやっても、現場と合わなくなっちゃいます。仲間からも生徒からもそんな自分たちには分からないと言われます。じかに、ありのままに言う機会は、正直に言ってありませんでした。ここに書いてあることは先生がたが対象ですし、しかも大学級の先生でしたので、高等学校の教員としてはそんなに生意気なことも言えませんし、ですから当たり障りのない原理的な理論的な線で迫っていったという姿勢になるのです。

あのときに、私が盛んに批評したのは、それまで世界史という科目はなかったでしょう。大学にもなければ専門学校にもどこにもない。それで世界史というものをどう扱うか。日本史がいくつで、東洋史がいくつで、西洋史がいくつという比率を作っちゃって、一つにしたのが世界史だと。そういうふう考えられていたんです。我々は、特に私はそうなのですが、世界史というものはそんなものじゃない。そういう分け方は一体どういう根拠に基づいているんだ、ということをするさくガチャガチャとやっていたんです。そういう問題は、世界史という概念がピシッと一つにはっきりしていないと言えないではないかと、たんに日本史と西洋史と東洋史とくっつければ世界史になるものではないと。それが私の主張でした。

## 8. 論文「社会科世界史の理論と学習活動の指導について」（1950年）

一 橘先生は、「社会科世界史の理論と学習活動の指導について」という論文を、『世界史の可能性』にお書きになっています<sup>33</sup>。この論文について伺います。

この本のできかたを申しますと、書いたものは座談会とは違うときに書いています。話し合いの雰囲気や踏まえてはいますが、その中にいないで、終わって一人になって書いたものです。少なくとも2〜3か月は離れています。それで、思い出して、あのときの思いを文章にしてみると、こうなるかなという感じです。

---

<sup>32</sup> 『世界史の可能性—理論と教育—』（尾鍋輝彦編、東京大学協同組合出版部、1950年3月）に掲載された座談会「世界史の基本問題」における橘氏の発言は、茨木智志「史料研究 橘高信著「社会科世界史の理論と学習活動の指導について」（1950年）—高校からの「社会科世界史」の主張—」（『歴史教育史研究』第9号、2011年12月、69〜75頁）を参照されたい。

<sup>33</sup> 橘高信「社会科世界史の理論と学習活動の指導について」（尾鍋輝彦編・前掲『世界史の可能性—理論と教育—』、271〜291頁）。なお、本論文の再録は、茨木智志・前掲「史料研究 橘高信著「社会科世界史の理論と学習活動の指導について」（1950年）—高校からの「社会科世界史」の主張—」（59〜68頁）を参照されたい。

— 論文のはじめに、いろいろな本を読まれて勉強された様子が書かれています。

私は大学で歴史をやっていないので、世界史を誰に聞いたらいいんだと思いました。世界史は日本にないから、外国でやっているところのいわゆる世界史というか、History というものは、どんな本を使って、どういうふうに教えているのだろうかと思いました。アメリカの教科書とか読みました。都合のいいことに、歴史の英語というのは易しいんです。あまり難しい言葉がありませんから。歴史の本は易しいので、トットコ、トットコと読めるんです。そんなわけで、いろいろなものが読めましたね。アメリカ軍が日本に来たときに、自分の持っている本を貸したり上げたりしています。それが我々のところにも来ました。

ですから私の歴史の知識は、日本の本というよりも外国の歴史の本を眺めて、世界というものの概念やら、歴史というものの概念などを作りあげています。

— 論文の後半には、社会科世界史の具体的な学習活動について書かれています。この部分は、文京高校で実際になさっていた授業をまとめられたものと言っていいでしょうか。

まあ、そうですが、まとめるというか、もっと正直に言えば、まとめるもっと以前ですよ。実際にこういうことで授業をしていると。

— 単元での学習を展開されています。

そうです。単元学習です。単元学習のころは、まだ教科書は十分できていませんから、生徒たちが思うままに、いろいろな教科書みたいなものを持ってきて、授業を展開しました。単元学習というのは、それこそ単元を中心に生徒がいろいろと調べていくので、調べていく途中で単元から外れて出っ張ることがあります。そういう出っ張りをなるべく単元を崩さないように抑え込んでやるのが我々の仕事でした。ですから、教師が声を大きくして「そもそも何とかという、こういう課題の問題は、…」なんていうことはしません。生徒のやりたいようにやらせてやる。それで時々抑えて、あるいは少しそそのかしてやる。そういう役割を、我々はやってきたわけです。

戦争が終わった後には共産党が動き出しました。生徒の中にも共産党員の子どもがいて、私なんかは軍隊にいましたから、怪しからん教師だということで、生徒に怒られたようなこともありました。そういう時期なんです。そういう時期に私が持ったのが社会科世界史でした。

— 論文の前半では、社会科世界史の理論について書かれています。これを書いているときのお気持ちや置かれた状況をお聞かせください。

世界史という名前は一体何に基づいて言っているのか。大学には世界史学科はない。ないとすれば、世界史という概念は学問としてはないはずだ。とすれば、我々が問題にしている世界史という科目の名前は一体どこから誰がどうやって作り出したんだ。学問として確立していないものを我々は世界史として教える。それは可能か、可能ならしめるためには、自分が世界史というものの概念をきちっと持たないとだめだろう。我々はそういう仕事ではない。世界史を自分がつくっているような顔をしてやっているのは、これは間違いだと。こういう観念が、私の中にありました。

仕様がなくて、単元を主体に高校で教える歴史というものを作っていけばいいじゃないかと。ただし、これは、高校の教員が生徒と接触して、単元学習をするために作ったやり方、あるいは組織であって、大学で大学の先生が学の蘊奥<sup>うんのう</sup>を究めるという立場で言っている世界史とは違うんだと。だから自分たちの言っている世界というものは、他に依るところがないから、自分たちでもって考えていけばいいじゃないか。その際に、世界というのは、地理で言うところの世界と、歴史で言うところの世界史で言う世界が一致するかどうかは分からない。分からないことを、分からせるのは、我々の仕事じゃない。それは大学の先生の仕事だから、それはそれで向こうにやらせて、こちらは自分たちの単元学習に都合のいいように、世界史をやる人は世界の歴史というものを考えればいいじゃないかと。ただし、考えたのは今の自分の置かれている立場で考えたのであって、大学の先生が大学で教えるような世界史を考えているものではないということのを頭に置いておけ。要するに、世界史は自分たちで作るんだと、ただし権威も何もないのだからそのつもりでやれと。そういうことを一生懸命に問題にしていたのが、我々でした。

世界史という概念がちゃんとしなくちゃいけない。そんな世界史の概念を我々に要求して何だ。これは筋が違う。そういう学の蘊奥を究めるのは大学であって、その大学の先生が「戦後我々は、前の世界と違って戦後の世界となったのだから、こうでなきゃならない」と言うべきだと、大学の先生に発破かけていたのが我々なんです。世界史ということを実際に考えてくれなければ、高校で教える我々は困ると。高校で教える先生が50人いて、50人が勝手に世界史はこうだと言われたんじゃ、とんでもないと。

— 高校の世界史の先生がたは、みんなそのように考えていたのでしょうか。

それで、私の主張がどういうふうにつながったかということ、全然通じないんです。大学で歴史を勉強した人たちは、それぞれ東洋史か、西洋史か、日本史かでしょう。そういう人たちに向かってね、全部ひっばがしちゃって、世界史というものを考えてみると言ったって、考えてくれないんですよ。社会科の先生たちが集まっても、「世界史はそんな面倒なものではないじゃないか、日本史と西洋史と東洋史をうまく振り分けてやれば、それでいいじゃないか」と。「それは違う、世界を漫遊する世界史とは違うんだ」と、ということで、仲間同士でいろいろな議論をしたことは覚えています。

私が戦争から帰ってきたときに担当したのが、いわゆる西洋史なんです。いつの間にか世界史になっていました。ですから、そんなものかと思ってね。私は気楽に東洋史と西洋史をゴッチャにしたものを教えていました。東洋史の比率がいくつとかの世界史ではとんでもないと、私は盛んに言っていました。「では、お前は世界史をどう考えるんだ」と言われると、「それは自分のやることじゃない。それをしっかりやるのは大学の教授だ」と逃げていました。「本当の責任を負えない人間だ」と、私は言っていました(笑)。

高校の先生というのは、生意気なところはあるけれども、非常に謙虚なところがあって、自分たちが教えているのは大学で教わってきたちゃんとした学問の裏付けがなければだめだと、もしそういう裏付けがなければ新聞記者と同じじゃないかと、新聞記者教師なんてものは教師じゃないと言っていました。そのときに私の頭に始終入っていたことは、世界史という科目が学校にできましたが、世界史という学問はだれが責任を持ってやっているんだと、いつも話をしていたんです。そういうことも含めて話をしようじゃないかということで集まったのが『世界史の可能性』に集まった人たちです。

## 9. 世界史学習指導要領の編集委員

— 橋先生は、最初の世界史学習指導要領<sup>34</sup>の昭和 25 (1950) 年度の編集委員をされています。編集委員会での様子を伺いたいのですが。

そういうのを、やりましたかねえ。学習指導要領でしたか、何でしたか、そういうことをやる大学と高校の先生が集まって、いろいろと意見を言い合ったことは覚えています。高校の先生も大学の先生に頭を下げる必要ないんだから、思ったことは言おうやというわけですね。大野さんとか一緒に頑張ったことはありますね。

— 文部省に集まって、皆さんで何回も会議をされたのでしょうか。

そうですね。集まっていたと思います。細かいことは覚えていません。

— 世界史の学習指導要領の編集委員は、橋先生を含めて、次のようなかたがたでした。ご記憶にあるのは、どなたでしょうか。また、委員会の中心となったのはどなたでしょうか。

世界史	
東京都立大学助教授	<u>太田秀通</u> (昭和 24、25 年度)
東京都井草高等学校教諭	<u>大野英雄</u> (昭和 24、25 年度)

<sup>34</sup> 文部省『中学校高等学校学習指導要領社会科編Ⅲ(a)日本史(b)世界史(試案)昭和 26 年(1951)改訂版』明治図書、1952 年 3 月。

お茶の水大学助教授	尾鍋輝彦 (昭和 24 年度)
東京都八潮高等学校教諭	河合佳枝 (昭和 25 年度)
東京都小山台高等学校教諭	日下部寅次郎 (昭和 25 年度)
早稲田大学教授	柴三九男 (昭和 24 年度)
東京都文京高等学校教諭	橘 高信 (昭和 25 年度)
中国研究所員	野原四郎 (昭和 24 年度)
武蔵大学教授	増井経夫 (昭和 25 年度)
北海道大学助教授	矢田俊隆 (昭和 24 年度)
金沢大学教授	箭内健次 (昭和 24、25 年度) <sup>35</sup>
(下線は昭和 25 [1950] 年度の委員 : 引用者)	

大野英雄さんは始終一緒にいた仲間でした。日下部寅次郎さんは仲よくしていました。二人とも歴史です。増井経夫先生は、いわゆるこのチームのリーダーのようなことをやっていました。増井先生の武蔵大学（東京都練馬区）は、私の家の近くでした。箭内健次先生は金沢大学教授ではなく、文部省にいましたよね。リードしていたのは箭内先生です。ですから、増井先生と箭内先生が中心になっていたようですね。記憶に残っているのは、この4人です。

都の高校の教員仲間で、都歴研という研究会（東京都歴史教育研究会）を作っていました。高校の教員は、その中から出てきていると思います。

— 橘先生も都歴研のメンバーとしてご参加でしょうか。

そうですね。

— こちらに、このときの世界史学習指導要領をお持ちしましたが、橘先生がどこを書いたとか、どんな意見を言ったとか記憶にございますか。

…、読んでみると、細かく、すごいことが書いてありますね（笑）。はっきりしませんね。覚えていません。「来い」と言われれば、若いから、どこへでもいろいろな会に行っていましたからね。

## 10. 東京都歴史教育研究会

— 都歴研（東京都歴史教育研究会）について伺います。都歴研は、昭和 21（1946）年 10 月 12 日に豊島中学（旧制）が間借りしていた元町小学校において、およそ 20 名の

<sup>35</sup> 文部省 『中学校高等学校学習指導要領社会科編 I 中等社会科とその指導法』（明治図書、1951 年 12 月）の「あとがき」2 頁。

出席で発足式を行なったとされています<sup>36</sup>。橘先生も出席されましたでしょうか。

そうですか、そんな会合をやりましたか。忘れてしまいました。

- 初代委員長<sup>37</sup>は、井草高等女学校<sup>38</sup>（旧制）校長の杉山文雄先生で、豊島中学・文京高校で橘先生とご一緒だった菅野二郎先生が副委員長をされています。

思い出しました。杉山文雄先生は、始終一緒にいた人です。高校の歴史関係の元締めのような立場の先生でした。菅野二郎さんは、同じ学校にいましたから始終話をしていました。ただ、会合になると別でした。世界史と日本史ですから、別でした。私たちは世界史の会を作っていました。日本史研究会とか世界史研究会とか社会科研究会とか、名前はさまざまなのですが、いろいろな研究会ができていました。人文地理の会もありました。日下部さんたちは世界史の会の一員でした。

- 研究会は、どのように開いていたのでしょうか。

会は、どこでしましたかね。とにかく校長室で開くんです。貸してもらわけです。校長に先ずご都合を伺って、「いいよ」というと、できました。私が校長になったときには（後述）、校長室とは別に学区の先生のための会議室を作りました。

何人くらい集まりましたかな。学区に高校が15～16あって、そこから1～2人来ると30人くらいですか、図体の大きい大人が校長室の空間をうずめて会議がもてると。そういう格好になっていました。発表することもあったし、雑談のように、ガチャガチャと終わることもあったし、開催日も、特に月一とか週一とか、決まっていなかったと思います。

それから、都歴研は文部省なんかと交渉しあう関係になるのですが、歴史教育をどうするかとは別に、現実的な目の前の当面の問題として、関西旅行を、いかに高校生にとって学習的に有効的に成り立つように実施したらよいか、ということがありました。私も関西旅行に行ったことがありました。

私は校長になったときに、都歴研も何も関係をなしにしました。校長になって、歴史だけでは、その学校の先生がたも困るでしょうから。

- 橘先生は、文京高校で公開授業とか、なさいましたか。

---

<sup>36</sup> 東京都歴史教育研究会（都歴研）については、大木匡尚「1946年度から1960年度における東京都歴史教育研究会の活動に関する考察—設立から全国組織結成に至るまでの活動概要の検討—」（『歴史教育史研究』第9号、2011年12月）を参照。都歴研については、以下同じ。

<sup>37</sup> 東京都歴史教育研究会の代表者は、「委員長」と称した。1961年度以後「会長」と改称した。

<sup>38</sup> 東京都立井草高等女学校：現在の東京都立井草高等学校（東京都練馬区上石神井）。

やりました。私の世界史の公開の日とか、菅野さんの日本史の公開の日とか、他の都立高校の先生がたに案内を出しました。

— どういう授業を公開したのでしょうか。

世界史の単元学習です。単元の中に東洋史、西洋史、日本史が入っていました。生徒が問題を作って相談しながら進めていくものです。

— 研究会でも単元学習のやり方を話し合ったのでしょうか。

研究会ではそれも問題になったことはあるし、現実にはやっておる単元学習そのものを、私はこうやっているというように紹介して、意見を聞くとか、批評してもらうとか、そういうことをやっていました。研究会に出ると、私はうるさい理論派でした<sup>39</sup>。

## 11. 世界史の単元学習

— 世界史の授業は、いつごろまでなさっていましたか。橘先生は倫理学がご専門ですから、倫理・社会<sup>40</sup>ができるまででしょうか。

最後まで世界史を教えていたと思います。倫社（倫理・社会）の先生は他にいました。もっぱら世界史でした。ただ、教頭になったり、校長になったりして授業から切り離されましたからね。

— 文京高校にはいつまでいらして、その後はどちらに移られたのでしょうか。

文京高校には昭和 43（1968）年までいました。その後、桜町高校<sup>41</sup>に異動して、半年ほどで、杉並高校<sup>42</sup>（全日制）で教頭になりました。昭和 48（1973）年から千歳丘高校<sup>43</sup>、昭和 51（1976）年から武蔵丘高校<sup>44</sup>で校長を務めて、昭和 54（1979）年 3 月に退職しました。ですので、豊島中学・文京高校には 25 年ほどいたこととなります。その間は、世界史でした。

---

<sup>39</sup> 『歴史教育』第 1 巻第 2 号（明治書院、1953 年 10 月）の「[主題]歴史教育はどう行われているか」において、橘氏は「近代世界」展開上の問題を執筆している。

<sup>40</sup> 「倫理・社会」は、1960 年改訂の高校学習指導要領により設置され、1978 年の改訂により「倫理」となって現在に至る。一般に「倫社」と略称された。

<sup>41</sup> 東京都立桜町高等学校（東京都世田谷区用賀）。

<sup>42</sup> 東京都立杉並高等学校（東京都杉並区成田西）。

<sup>43</sup> 東京都立千歳丘高等学校（東京都世田谷区船橋）。

<sup>44</sup> 東京都立武蔵丘高等学校（東京都世田谷区上鷺宮）。

— 同窓会報を見ますと、80歳まで教壇に立たれたとのことですが。

校長を退職後は、都立教育研究所<sup>45</sup>で先生がたの教育相談をしていました。その頃からでしたか、講師として国士館短大<sup>46</sup>で哲学をしばらく教えていました。短大生で卒業後に大学に進む人たちを対象としていました。80歳で辞めるまで、ここで教えていました。

— 橘先生が担当された約20年間の世界史の授業は、ずっと単元学習でなさっていたのでしょうか。また、単元学習について、もう少しお聞かせください。

そう、単元学習です。私の時代には、生徒に発表させるというのが、流行ってくるというのはおかしいけど、授業の中心を占めるようになったでしょう。それまでは先生がしゃべっていて、生徒が黙って聞いている。それが、生徒がしゃべっていることを、こっちが黙って聞いてやって、時間の調節をうまくつけてやる、というのが先生の仕事になりました。ですから、昔風の先生の名講義というのを聞かせるようなものは、あまりありませんでした。

私は高校において世界史の概説ということはやったことがないんです。単元学習ですから。単元というのは、身近な問題を自分たちで問題にするわけですね。それで、分かったことばかりをやるなら、それは新聞記者と同じだから、そうではなくて、疑問があるという点を考え出して、それを解く、勉強をする。ということで、単元学習を、生徒とやっていました。

ただ、受験生には、受けはよくありませんでした。受験勉強に役に立たないということで。自分が生徒に嫌われたのは、歴史の始めから終わりまで授業を続けたことがないからです。単元のグループ学習になると、教科書なんか問題にならないんです。教科書の中のほんのちょっとしたことに興味を持つ生徒がいろいろなことを言うでしょう。それを面白がって、「そうだ、そうだ」、「だめだ、こうやるんだ」なんて言っているうちに、1年が終わってしまって、時間がなくなりますから（笑）。教え子が授業を覚えてくれますかね。

— この当時は、社会科の学習指導要領やその他の本がたくさん出されていましたが、単元学習の参考にされたのは何でしょうか。

何を参考にしたのかな。特に記憶にありませんね。

---

<sup>45</sup> 東京都立教育研究所は、1954年に開設され（東京都港区）、1966年から東京都目黒区に存在した。2001年に廃止され、東京都教職員研修センター（東京都文京区）に統合されている。

<sup>46</sup> 国士館短期大学：東京都町田市にあった短期大学。現在は国士館大学に統合されている。



— では、世界史の授業のときのノートや資料などは、お手元に残っていますでしょうか。

残っていません。何を勉強するかも生徒が組み立てていくものですし。

このころ、私の頭を離れなかったものは、歴史ではなくて倫理学という一つの哲学的な分野のものでしたので、教えることと頭の中にあることは違っていました。違っていたから、世界史についても、ものの見方も、他の人と違っていただけかと思うんです。そういう形で、世界史を教えてきましたよ。教えてというか、扱ってきました。単元学習では、教員は教えることをちゃんと持っているけどリードしてはならんと。リードすれば、それは講義学習であって、単元学習ではないと。議論をしているときは、そうだとと言えるけれども、実際にやるのは、なかなか難しいものです。

## 12. 再び論文について

— (大木) 橘先生の1950年の論文(「社会科世界史の理論と学習活動の指導について」)について、もう一度伺います。私は、橘先生が、社会科世界史を、手本も何もない中でつくっていったときに、どのようなことをお考えになっていたのかということに、非常に興味があります。ここで、橘先生は、「歴史学者に『社会発展の当為の学としての世界史』の学問的研究を要請したい<sup>47</sup>」とお書きになっています。これは、これからつくっていく社会科世界史というものを、当為命題としてお考えになっていたということでしょうか。

そういう思いでいたんですよね。「歴史学者に」と書きました。ここに自分たち高校の先生は入れていません。

— 論文では、その後で、「社会科世界史のよるべき理論」として、「四 国際的当為としての人倫の学の理論」を最上位に挙げていらしています<sup>48</sup>。橘先生は、社会科世界史というものを構築するときに、非常に形而上学적으로お考えになっていたのですね。

このときの私は、真面目になって考えていましたね。ただ、誰がやるかということになると問題があります。自分が学問としてやる資格はない。高校の先生では、やれば僭越<sup>せんえつ</sup>になる。大学の先生にやってもらいたいし、やるべきである。言うことは言っても、学問としての大事な方向を指していることは、いくらでも言ってもよい。ただし、それを

<sup>47</sup> 橘高信・前掲「社会科世界史の理論と学習活動の指導について」、276頁(前掲の再録では、61頁)。

<sup>48</sup> 同上、277～278頁(前掲の再録では、62頁)。

自分が学問としてやる資格は自分にはない、やらなくてはいけないのは大学にいる先生だというわけです。

- 「人倫の学としての社会科世界史」を構築するという弁証法的な仕事を、大学の先生にやってもらいたいという願望が、橘先生にあったと存じます。一方で、先生ご自身が社会科世界史というものを形而上学的に思弁なさって、その最上位に「人倫」を置かれ、そして、当為命題として社会科世界史を組み立てようとなさっているとも拝読しました。こういうことをお考えになっていたときの先生のお気持ちは、どのようなものでしたでしょうか。

世界史を教える立場にあったから、嫌でも応でも教えなければならないわけですね。しかし、自分にはたして世界史を教えるべき条件を備えているかということを考えているのが、当時の自分でした。それから考えていくと、自分は世界史という学問を学んできた人間ではなく、やはり倫理学をやっている人間でした。それでも、十八番違いのことを、これから自分は現実に子供を前にして教えて行かなくてはならない。そういう自分が言えることは一体何かということと言おうとしているのが、この当時の自分でしたね。

では、何を言ってもよいのかというと、そうではない。言いたいけれど、自分は言うだけの資格を持っていない。では、誰がというと、私はいつも、それは学の蘊奥を究める者がやるべきであると。だから大学の教授がやらなくちゃならんと、それが私の理屈なんです。

- ということは、橘先生のお考えの根底にあったものはドイツ観念論の哲学や倫理学の考え方そのものですね。

論文のどこに書いたか忘れましたが、倫理学の考え方で書いているところがあるはずです。「歴史を教える立場」から考えなければならないとすれば、どういう思想なのか、どういう学問なのか、その基礎の上でやらなければならないという要請が当然に出てくるんですよ。

- 自分の中に、ということでしょうか

そうです。要請は出て来るけど、その要請を言う人間はその要請にこたえる必要は必ずしも必要はない。自分でその仕事をするにはあろうけれども、それをやる人間は別にいる。それは学の蘊奥を究めるところがあり、そこにいる人間がやるべきであると。

- 東洋史でもない、西洋史でもない、日本史でもない、それらをくっつけたものでもない、世界史というものがあるべきだと思いいったということでしょうか

そういうことになりますね。

- 大学の研究者は、尾鍋輝彦先生をはじめ、現在でも最終的には答えていないということでしょうか。

そうですね。

- 橘先生がお書きになっているような授業が今でも世界史の中心になっていけば、今の世界史はずいぶん違ったものになっていると思いますが。

駄目ですね。全然、駄目。昔ながらの受験勉強的なものになっちゃいましたね。

### 13. 再び世界史の単元学習について

- 改めてご自分が書かれた論文をお読みになって、どのように思われますか。

自分で自分のことを言うとおかしいですけど、わりかた正当なことを言っていると思います。自分はこう思うということを言っていると思います。なかなか生意気なことを言っていますね。でも、それでいいとも思います。

世界史という教科をどんな考えかたでやらなければならないかということを、私はこのときに真剣に考えたわけです。その考えたものは、今もって変わらないです。けれども、現実はどうなっているかということ、講義学習に戻ってしまっているわけです。なぜかということ、高校生が行こうとしている大学そのものが、その体制になっていないわけです。世界史を真剣に考える体制になっていません。とても無責任ですよ。私は最高学府としての大学というものを高く評価したいのですが、大学にその気概があるのでしょうか。

- 「受験生には、受けはよくありませんでした」というお話もありましたが、単元学習をしている橘先生のお考えと、受験のための授業を求める生徒の希望との乖離は大きかったのでしょうか。また、関連して、単元学習はどのようにまとめたのでしょうか。

単元学習に入って、子どもたちがそれぞれ色々な問題を持ってやっているでしょう。それが最終的にまとってきたときには、一体どういう形になるかということ、それまで何にもないんですよ。そして、「これだけの勉強をやってみて、こういうことは分かったけれども、こっちは分かっていない」と言われてしまいます。「だから、先生、そのところを講義してください」と言うのが出てきてしまいます。それでは、ペシヤンコ

ですよ。全然、何もなくなってしまうわけです。

それぞれのグループでもって単元の学習をやって、最後にまとめて発表の段階に来ますよね。今までやった自分たちの学習のまとめが、そこで一つ、つきます。そのまとめがついたところで、彼らは満足するわけです。ここまで自分たちにできたという。それを先生がどう評価するかなんて、問題ではないわけです。やっている楽しみや気合いの上で、それでいいのではないかと、私は思います。ところが、教師が変に通信簿を書くと、みんなぶち壊しになってしまう。それを出させないように、元気にやっていかせるのが教育だと思います。理想は、そうです。

でも、これで大学に行けるかと聞かれれば、そうとは言えないわけです。だから、大学に行くための学校であるという今の教育組織制度というものが、何かどこかでおかしいのではないかな。現実にはありますが、ただ、どこかでおかしい形をなくさないままあるのではないのでしょうか。

言いたいことはかなりあるのですが、どういうふうにお話ししたらいいのか。どう考えて私が教えているかということ、それを受け取る生徒たちがどう受けるかということ、私の思った通りに受け取ってはいないわけです。「先生がそういうふうを考えるのは正しいかもしれないし、適当かも知れないけれども、自分たちが大学を受験するときに出される問題と、先生の言っていることと、うまくくっつかない」と言われます。「受験には役立たないのではないか」と生徒は思ってしまう。それが、私には非常に困りましたね。単元学習を一生懸命やったつもりでしたけど、受験のためには望ましい授業ではありませんでした。それが、私には一番の問題でしたね。

— 一般的に、世界史の授業は、単元学習よりも、やはり講義のほうが多かったのでしょうか。

全体的には、世界史を講義式でやっているほうが多かったと思います。おそらく単元学習世界史というのは、以後はありません。講義学習に変わってしまったと思います。変わってしまったというのもおかしいけれど、そうなっていると思います。

— 世界史の単元学習を進めるときに、苦勞されたり、工夫されたりした点があったと思いますが、どのようにされてきましたか。

そのころ授業で何をやっていたかを思い出してみると、講義はしていないのですが、単元という名前の問題はできているんですよ。「これから話をするから聞けよ」という授業はしたことがありません。

「今、何か問題があるだろう。そういう問題をみんなそれぞれ言ってごらん」と、「ただし、問題は何でもいいわけではないよ。これから勉強していくにおいて、自分はどういうことを注意なくちゃいけないか、どういうことを先生に聞きたいか、どういうこ

とを友達と話し合ったらいいか。そういうことをテーマにして、今、自分は何をしたいか考えてごらん」と。そういうやり方をしていたわけです。

だから、自分の気持ちの中には講義をしようという気持ちはあったのでしょけれど、それを全部抑えてしまいます。そうして、生徒たちが一体どんなことを問題にするのかだけを見渡しながらいたわけです。子どもたちが何を考えるかは、こっちには分からない。だから、何を言われた場合にも、自分が詰まってしまったならば、「あの先生は駄目だよ、何も答えてくれない」となって、先生の立場はなくなります。

なくなさないためには、「そういうことが問題なのか。ならば、こういう本を見たことがあるか」と言ってやるんです。そうすると、どこにあるか聞かれ、「図書室に行って見てごらん」という具合に進めていきます。生徒が何を言うか分からないから、戦々恐々として子どもの前にいるわけです。どんなことを言われても、それにたじろがないだけの肝つ玉を据えて、そこに座っていればいいわけです。

生徒はとんでもないことを言い出してきます。「そんなこと聞かれても分からないな」と言うと、「どうしたらいいですか」と言われ、「図書室に行って見てごらん」と(笑)。

そのくせ、答えることはちゃんと決まっているわけですが、けれど、それは言わないで、私にぶつけてきた問題に対して、その子どもがどういう姿勢を取るかということが、私には問題になります。そういうのを、私の教育の目当てにして、教師をしていました。

教えようということを、考えていないのですね。どうやったら、この子が動き出すかなということが、むしろ問題でした。「先生、図書室に行っていいですか」と言われると、「行ってこいよ。ただし、授業の終わりの時間は決まっているんだから、戻ってこない」と困るよ」と言って、追い出してやります。

生徒がはたして問題を解決したか、どういうふうに分かったのか、こちらも〈ずるい〉から聞きません。帰ってきて「分かりました」と答えても、こちらは鵜呑みにしません。あの子は課題のものはつかんできているはずだ、あの子は行ってきただけで、こちらからつついてあげれば、いかようにも〈いじめられる〉などと、こちらは見ているし、考えています。そういう対応の仕方をしていたわけです。

だから、50人いれば50人ひとりひとり見えていますから、忙しいといえば忙しいわけです。生徒にとっては、〈ずるい〉私にだまされても、自分に対応してくれないと教師ではありませんしね。そのような気持ちでやっていました。

— 最後に、生徒に対して、どのようなお気持ちで、世界史の授業をなさっていたのかをお聞かせください。

そういうことを目指している教師であるということだけは譲りませんでした。生徒に対して、もっと上のことを勉強する気持ちにならなければ仕様がないただろう、という気持ちが根底にありました。「満足するな、不満を持って、ということも君たちに求めるんだ

よ。どんな不満や悪口を言って自分のもとを去っていくかのほうが、自分にとっては楽しいんだ」と。そういう気持ちでやっていましたね。

— 長い時間、お話をお聞かせくださいまして、本当にありがとうございました。

## 後記

いく度ものインタビューの願いを快くお引き受けくださり、多くの貴重なお話をお聞かせ頂いた。社会科世界史の出発点において、世界史を根本から思索し、社会科世界史の単元による授業を実践されてきた体験は、大変に興味深いものであった。お話を伺いながら、世界史教育が何のために始められたのか、何が世界史教育であるのかなど、後進の我々に突きつけられた課題を感じずにはいられなかった。

最後に、多くのお時間を割いて、貴重なお話をお聞かせくださった橋高信先生に厚く御礼を申し上げます。また、関連して、ご協力を仰ぎました東京都立文京高等学校同窓会に、記して感謝を申し上げます。

(注記に関して、さまざまな文献やホームページの情報を利用させて頂きましたことを申し添えます。)

(文責：茨木智志)